

津波の被災地、岩手を訪れて

多賀たが中学校ちゅうがこう

二年四組

黒瀬くろせ

羽那はな

その木は、天に向かって手を伸ばすように立っていた。岩手県陸前高田市の「奇跡の一本松」と呼ばれるその木は、約七万本の松並木の一本であった。東日本大震災の津波で、その一本の松のみが耐えて残った。その松の近くには、窓が無く、校舎のコンクリート部分のみが残った、異様な姿の「気仙中学校」が建っている。

この夏、父と岩手県沿岸を巡る旅に来てい
る。岩手県沿岸はリアス式海岸のため、湾が
多く、漁港がたくさんつくられている。その
漁港ごとにクレーンやトラック等の重機が集
まっていた、復興のための工事が行われてい
る。目的地である大船渡市の三陸町の沿岸に
は、見上げるような防潮堤がず々と続いてい
た。

父が学生時代にお世話になった地元の方の
家に泊まらせていた。ただき、津波があった当時

の話をとくさん聞かせていた。たいた。

三陸町では、十一人の方が津波で亡くなつたとのことだ。その内の一人は、父と同じ大学の女子生徒だったらしい。彼女は車いすに乗った高齢の女性を助けている途中に津波に襲われて、行方不明となつてしまった。

また、三陸町にある診療所の先生は津波から逃れる際に、
「若い人から率先して逃げるように！」
と指示を出したそうだ。

この両者の判断と行動は、とても勇気のあつたものだと思う。自分がその状況に遭つたとしたら、どのような判断をするであろうか。危険を顧みず誰かを助ける行為も、自分が助かるために全力を尽くすことも、どちらも正しい行為であると思う。大事なことは、この教訓を将来に生かすことだ。災害はどこでも誰の身にも起き得ることだ。だからこの旅で津波の被害に遭つた方の実際の話をお聴きすることができて、とても良かった。テレビを通して

映像を見たり、インタビューを聞いたりして
も、どこか遠くの場所の話に思えてしまい、
なぜか他人事のように感じてしまうものだ。
今回、実際に津波の被災地を訪れて、見たり、
聞いたりすることです。もし、自分の身に同
じようなことが起こったとしたら」という当
事者意識を持つようになったと思う。あるい
は、「自分は被災地のために何かできること
があるだろうか」とも思うようになった。

私の名前には、「たくさんの人を助ける者
になつてほしい」という想いが込められてい
る。もし、自分の周りで災害が起きても、自
分の身を守れるような準備をしておき、たく
さんの人を助けられる術を身につけておく必
要があると思った。